ボランティアの養成・研修事業

ボランティア養成講座

１．事業の概要

○　事業の趣旨

子供たちの体験活動に関わる上で必要とされる野外活動のスキルや安全管理、体験活動の意義や青少年教育施設の取組の実際について、実習や講義を通して学ぶことにより、ボランティアとして子供たちとともに活動し、自然体験活動の楽しさや喜びを伝えることができる青年の育成を図る。

○　実施期間

令和６年５月２５日（土）～令和６年５月２６日（日）　１泊２日

○　参加者数

24 名　（高知大 16 名、高知県立大 7 名、高校生 1 名）

○　講師

瀬沼　健　　氏（高知県キャンプ協会 会長）

田辺　秀　　氏（WILD BLUE 代表）

国立室戸青少年自然の家　職員

○　活動プログラム

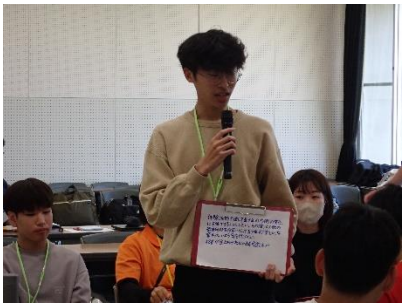
	5 月 25 日（土）		5 月 26 日（日）
10：00	開講式	07：15	朝のつどい
10：20	青少年教育	07：30	朝食（食堂食）
12：10	昼食（食堂食）	08：45	退所点検
13：00	ボランティア登録制度について理解する	09：00	ボランティア活動の技術②「野外炊事」
14：10	ボランティア活動の技術①	12：20	安全管理②「熱中症対策・緊急時の対応」
15：20	青少年教育施設の現状と運営	13：30	ボランティア活動の意義
16：30	青少年教育施設におけるﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動内容理解	15：15	閉講式
17：30	夕べのつどい		
17：45	夕食（食堂食）		
18：30	安全管理①「危険予知トレーニング」		
20：30	入浴		
21：00	情報交換会（自由参加）		
22：00	就寝		

２．活動の様子

瀬沼健氏（高知県キャンプ協会　会長）、田辺秀氏（WILD BLUE　代表）を講師にお招きして講座を実施した。「青少年教育」及び「青少年教育施設の現状と運営」について、当施設の西岡所長に講義とグループワークを実施していただき、青少年教育についての理解を深めた。瀬沼・田辺両氏には、「青少年教育施設におけるボランティア活動内容理解」「安全管理（①危険予知トレーニング、②熱中症対策・緊急時の対応）」「ボランティア活動の技術（①アイスブレイク、②野外炊事）」において実施の活動を意識したご指導をいただき、実践的に学ぶことができた。

青少年教育

青少年教育



青少年教育

ボランティア活動の技術

ボランティア活動の技術

青少年教育施設における
ボランティア活動内容理解

青少年教育施設における
ボランティア活動内容理解

青少年教育施設における
ボランティア活動内容理解

危険予知トレーニング

危険予知トレーニング

危険予知トレーニング

集合写真

３．事業の成果と課題

〇　参加者の感想

・青少年教育について考える貴重な機会になった。

・学びや気付きが多かった。

・楽しさと学びが両立されていてとても良かった。

・座学はしんどかったけど、非常に実りのあるものだった。

・ボランティア活動をする上での必要なことを学べた。
・今後の活動に活かせる事ばかりで学びになった。
・子供の目線を考えることができるようになったと思う。
・注意するべきリスクへの対応力など力になった。
・子供と関わる際の注意点などを確認できて良かった。
・色々な視点から物事を考える力がついたと思う。
・学生同士以上に職員さんと交流ができて良かった。

○　事業の成果

・実践的な講義（危険予知トレーニング～野外炊事～グループワーク）を行ったことで、子供の視点で考えることや安全の確保（危険予知）について理解が深まり、多くの参加者が今後のボランティア活動や日常生活に活かせる良い経験になったと思ってもらえた。
・受講のたびに新たな学びや気付きがあり、毎年受講する必要があると感じた参加者がいたこと。
・情報交換会（自由参加）を行い参加者の学生が講師や職員と直接話をする時間が作れたことで、講師や職員を身近に感じられるような交流や意見交換ができ、講義や普段の活動とは違う学びの機会になったこと。

○　事業の課題

・参加者数が目標値（１施設 41 人）に満たなかった要因として、食費の値上がりに加え施設使用料を徴収したことで、参加費が前年の倍額近くになり学生にとっては負担が大きくなったこと。法人ボランティアに登録する為には一度受講すればよく、毎年の受講義務が無いことから昨年度の受講者数（５１人）から大きく減少した。目標値を満たすためには、高い参加費を払ってでも、受講して良かったと思われる魅力あるプログラムを企画し、新規の受講者だけでなく受講済みの参加者にも毎年受講してもらえるようにする必要がある。
・1 泊 2 日で 13 時間のカリキュラムを実施するには、時間割がタイトあった。オンラインでの動画の事前視聴を導入するなど、当日の実施時間を減らし時間割にゆとりを持たせられるような取り組みを検討する余地がある。